落花情談

春風日記

松村春輔著

五篇　上

A517

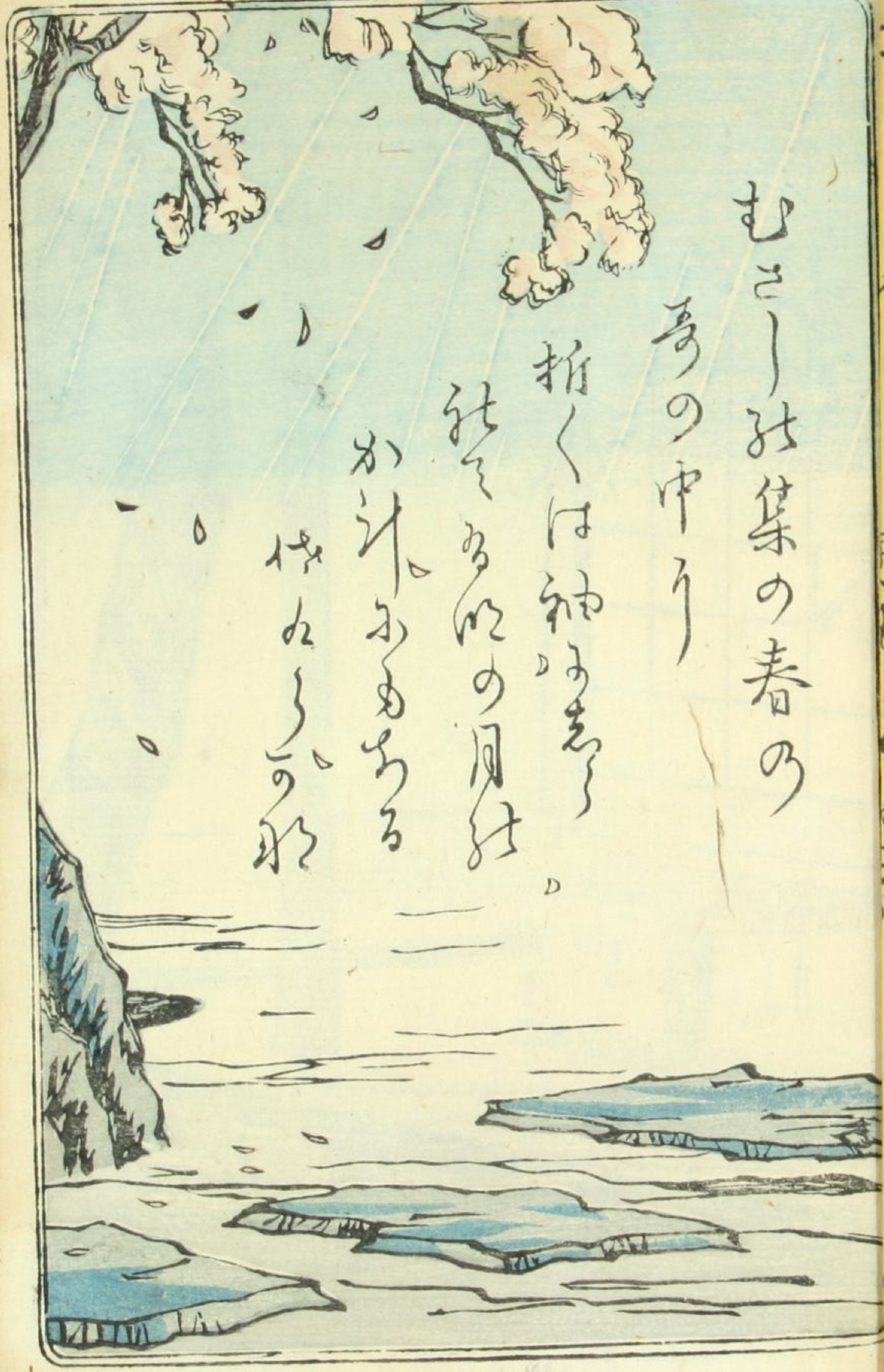
櫻雨園主人著
松齋吟光畫

落華清談 春風日記

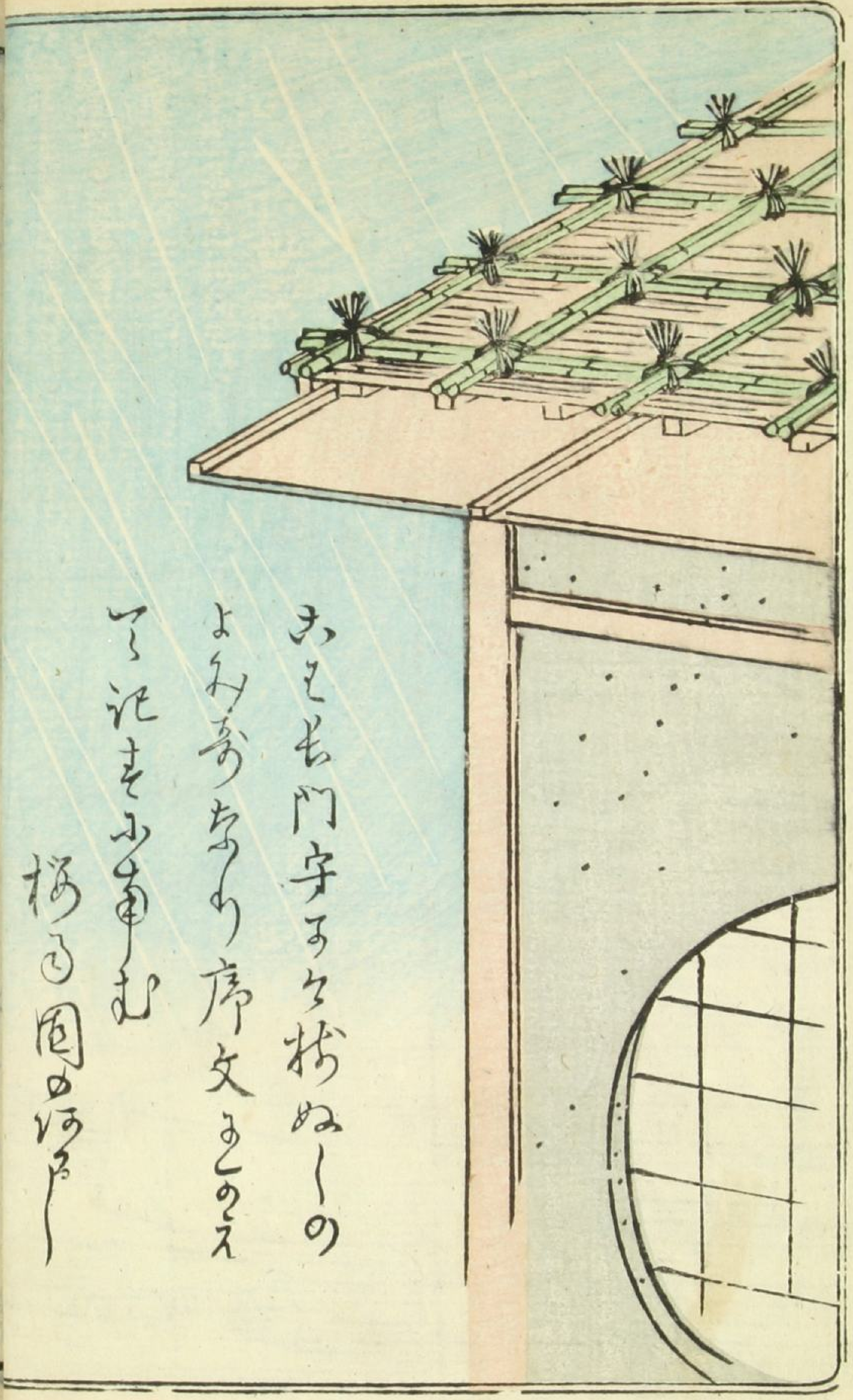
二編 二冊

東京 二書房合梓

48-7515



隣りまも
志のひきま
聞く
花の雨



落花清譚 春風日記第五編上

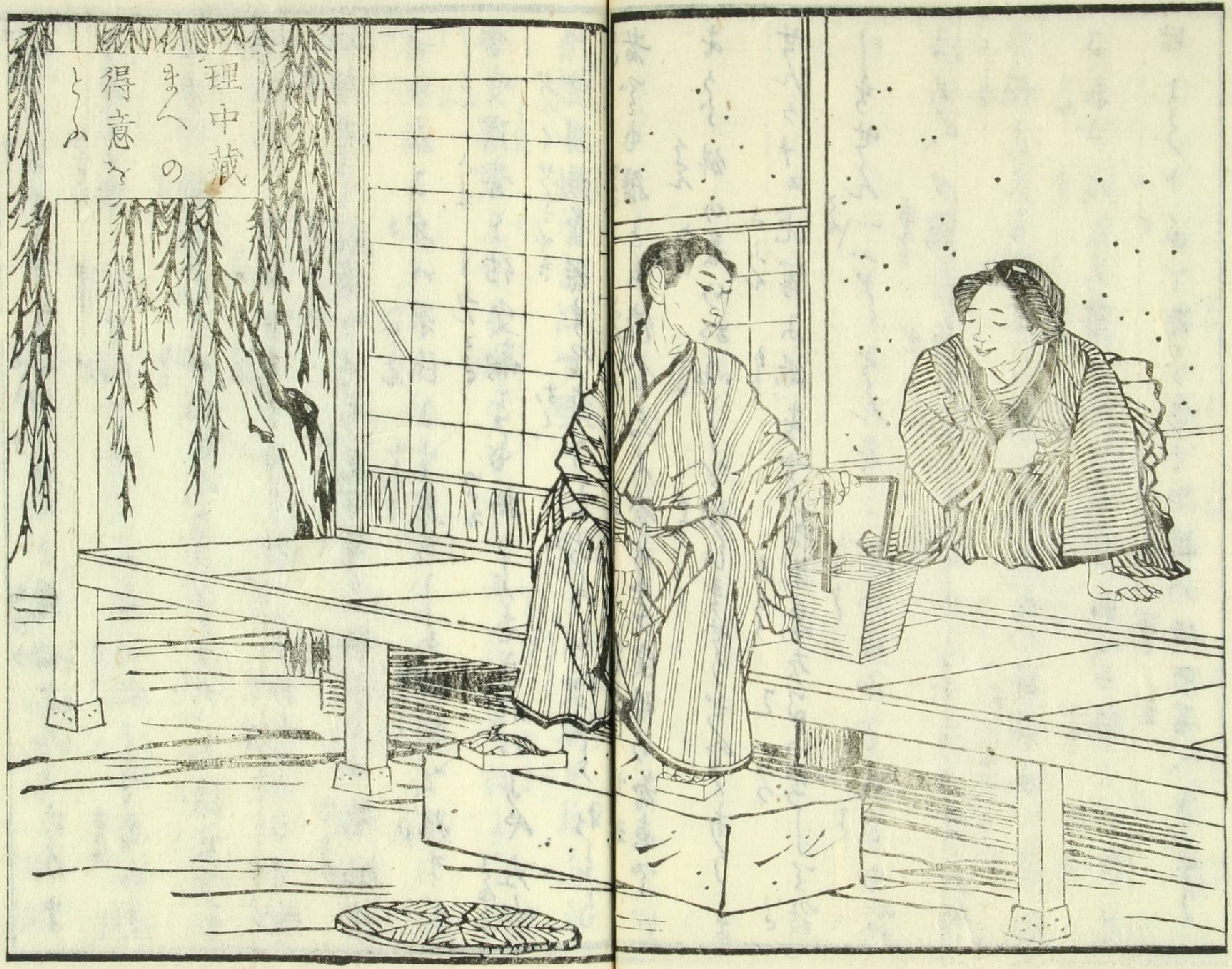
第拾七章　東京　松村櫻雨著

霙雨より雪となる日の内地して來る雨あらし數
る櫻かなこれ仲田顯岩が能く讀み得つる多逸
の丁ど時候も四月の旅や八重のさくらも咲き
暢て誘ふね風にも散りかゝる春の中に庭の軒の
雨も家にも遠き内地なる折から並木堀端六方れ

此程よりして世の中を思ひ捨しにはあらねども
鬱々として楽しまず今日も内輪の徒然に無
聊て居る次の間より下婢〽旦那さまアノ理中さんと
申まする人が入しつて旦那さまにお逢申したいと
お店に待て入つた中におかせがお通し申ませうし
又宜しうございますかへ〽アヽ理中か此方へ呼びねへ
〽ハイお招申しませうと下婢は椽子の方へ行く
入り代つて幇間理中二重んの下の光に黒羽二重の
〽ヘイ旦那此間は難有く如何でございます玉子落
笹おりといふ気候よさつぱり御出しもござい
ませんのはいかゞし〽なんぞ別に溜れる筋もなし又
適のやア正面で居なけりやア世界の思惑も〽オヤ
なんぞで酒宴を切つて客ではおれの手も下卑れ
邪魔しちや済まないちやア罪でございますぜ〽どふして
お為への者へ違つて野暮な理で一月おくま
だ御咄しに遊んで覚えなしサあも可哀さうが梅

兄の保養に余義なく引出されて亀井戸か
ら向島の菊塢まで廻つて随分寒ひ思ひをしましたサ
ゼイ「ぶつ付な連客さ夜の事でげすがどうかせ
向ふ離しの方へ浮れて来ましたが今宵は
まち女郎の咄題向が借よりねへ此念手業の「アハヽヽ
後「ナニ左程ではねへが可笑い皆なれ仲町の様りで
三圍の下から渡つて往ふとまつに私はどうも進
まねへから其所で気耗悪く別れて其後寂しく
飲つさらうぢやアねへか「リ「なんだと「後「ナニ嘘だぢやア
ねへ夷と云ふも悪しき洪のある程極デ「アーなる程
「まづ咄しも出ねへ内から感心するにやア及ばねへは
「ヘヽイ何さね「聞かねへまアヘイドきりで聞きかねへ
「ヘイ「なんでも去年の霜月頃だつたが暑ナ夢を
見るの其夢がどうか若へ女と見ても独り落着ねへ
気になるのがあるのサ魂も夢は丑継の頃ひと
云ふうらそんな気に出ねへでもの事だが其頃

わたしなんざァ嫌な気が結ぼれて世の中が遁れ
へん心持になりまして酒が過ぎ困り者でござります今日も左
様でござりまする春雨は花が降りて降りまする
腰が痛うございまして何とも気持の悪へ手もとが
めんが落ちて居ますのでござりまして其内へ一寸ばかりやア
繕ませんねへ究竟癪ひは気がふさぎまして桃灰
おふ落ちる上中もつぶしなさんでも気をおもはしなさ
るが男一生でござりまする上考へます骨付肝の中ちう
者でも攘とも能合ふ人参がやア文殊の智恵でげ
ますが併の夢のお咄しを伺ひませうぢやアありま
せんか十二経絡に漏まするを果なふ悪しく致
しませんへハアそんなら押療治などのようも
るめんが錦りも白咄しよりもなりゆうえね
へ得まんな半分し病人などでは神経病を起き
る様ごなの子の咄しぢやねへか、時よっ拍付
けようト身をなうくもや病いの首へきせり


理中蔵まへの得意をとふ

〽ヘイめしましやう〽アヽなんざ慈母さんにさう申
して銚子に酒を出してくんなさい相しけ肴の来
るまで待ちやすが相手がねへから。コノワタ。と海苔でも
能ひかへ酒をはやく出しな〽ヘイ只今にと下婢
は極めて酒肴をもち来る茲に物好が気風は
さうりんに系は茶民に生立ちしも性惜を好まず
学文修習に依り文雅とも極まりされば左右
の文具煎茶器まで着ると云ふはいはずともなり

自然と撰みき品を置せず少しも下婢が持ちだ
せし器物をも知りたまへ廣蓋は朱檀にて文
人好みの形壹尺四寸四方位に能く巾き込をし
物とみえて光澤有り鏡板には樋田撰松が篆物の
彫刻あり丼は五らう大夫の染附に細工し唐津のさ
び物も数しかけと覺ゆ是にて器つぎよしなる
は鬱陶しく香の物の小丼は青磁の人形づき盃洗
は粉文字の鍋の膳物猪口は宴田焼乾山の一對物

盃ハ永楽の結構なる金襴染付と高麗のチツト大形
の猪口に四ツは小皿の南京染付なんと肴器の利
さ道具でもう中の肴も徳利の酒も吟して野暮だ
ゆへ何りの事めへ〳〵 〽サア 料理茶屋めナ いつも家内ぢやア
芸者なんらか甘くあるめへが先ず花をがあるうも
知れねへ サアさ お酌と出ゆう 〽へヽイ どふも お嬉
の結構なる御趣向 恐れのり 生先十二手酌で頂き先
ま旦那様が一トツ 〽へイ 出さげへよ 独酌気随で結ら

うぢゆうなるは 〽ハイ それが流行で御座いますね旦
那一トきまり勝手へお客としこ時なんぞの場所で
ざいましたがウ狂言に一軍になりますがア時分
よ子供藝妓が大分引たり又新物が幾度か弘め
で出ましたらうが実はおんな世界は別な物で私ども
の稼業でさへ驚し外物所が縁はでまかると気解
と操振が妻の名若まかく物でござりますよ 〽そう
ゆへそんなことも穿時はいけさうざか小客が居ねへ

やうにあつさりとゐる不思儀なのかねへ〽さうで
まことにアレほどうつりのよう流石の狸中も眼の玉を抜
れましさ実に具形の女人にも勝ない程で〽はてナ二十
おかめ人の気のきゝてもねへのむかアレ切り影も形も見
せねへといふ獄度考へても有るいはないのサ〽併し小
露さんの体に付きまし近日ならつとはお楽し
そこになりはるなら少しもなゐくる知れません〽ハア左様
かそいつア妙ぞそれだから小露の居る処もおかめ人は影
知ぞの〽十二そりでも有ませんが甚だ残まれる
すがなりますのごかまぞ具形に為少しやまとの中存し
く窮屈さうへでなくつちやア面白くござゐませんデ
〽ハくあてお女人の影はれさと云ものかいかにも
さうでもねへのか〽十二小露さんかゞ残まれさと
申すぞもなく承知に様子柵んぞ一併がなりま
よ物ぞらう〽コレしそんなに物併ぶらないでゐし
ねへナ〽ハアしそうおあるりませんがまぞ実は探

索中でござりますから鳥肉に喫度なんどゝ御酒
延致しますへ別に呼るゝのもねへ請が勝
呂ごと云ふでもねへから白く痴げて悪しござアどの
ちうど云ひやア呼かないのも飲ひのゝ納らん〽全交
だがりやア大丈夫でござらうと思ひますが十二日の晴
よなりさらへで見度くつちやアありません試合
亜のとり詣り
と承りましたへ〽餅し旦那是からその咄しの先
へ廻る彌次郎からしゝはありますから法眼皆が頂戴

デ供てまおりませう〽マア然ひぢやアねへかのよ
も食へる物はねへが壱ウ一二盃大飯ちやアどうかござ
〽どふしてモウ頂くのれませんお大根の腹がちがふの
きと来て居ますのサハアゝ旦那それぢやア遠ふ致
しませう〽どふ云ふのご〽今から彼の口の揺蕩
残遂げましてサ然ひとなりますから明日はも細ひますも
からそうなると旦那此程中めと先鋒として御出
陣をお願ひ申ます先その顔の色と云ふは両関将

の手まへを西へ大川端に二三丁白服をきたるさ
ぬ矢の倉のオツト大事あぶなくお弁舌をきる処
だつさハアヽハヽヽ時にちやか暇男を殺しませう〽丈
ぢやア解るのかお影で今日は面白かつた重内よ
まさ来ねへナと云ひつゝ紙帯を紙に包てなげる
理中のまへに出し〽これや餘りの車代だヨ〽是れ
く毎るなぶの法張物有難く頂戴のお頭首
なしでまかりませう扨からは輝は跳子の代り

と申ら来り〽下オヤあつお帰りでまつ扨笛お琳の
縫ひの紋を持てまかりましさ〽是れしはお松ちやん
桐雲たる袖子の縫ひことと男殺しの派長かハヽヽ
〽ヲホヽ呂でまねへ〽否とは思服の辞へぶらふりね
上はずで逆て出て理中さん後ほどでまちら私の
思ひ結ぶ心をきかしてお手ヨツト邑のいの
家の縫ひ返すとどへだ宇せてやきさんせいナア
この意ひ叶えねそのときは私は生ては居られまと

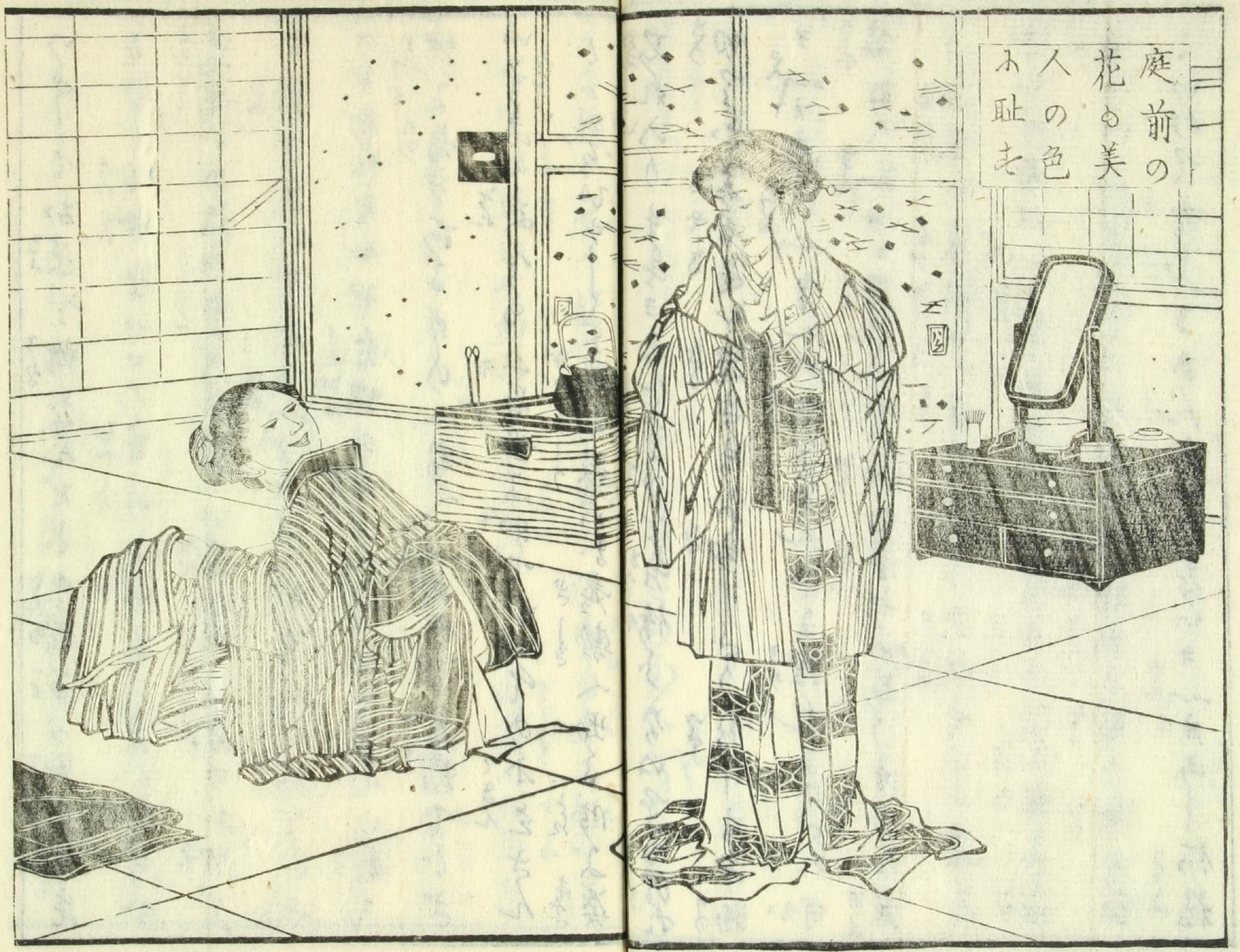
んまひあると斯る悋気振りまはして見せるまへおかし
知りませんヨー

第拾八章

却説小露は去年の冬菩提苑を訪ひて主殿さへ
懐しき菩提に結びしより更でも日頃なかりし
ゆかしく恋しと想ひし主人の優しき言葉や振り
なりとつのる思ひの中る瀬なく繁く小梅に通
ひしに埋提苑の母親は上総より帰りしに
屡渡しも訪ひかくて物を見合せ浅草町の小露
が数々通ひ来る提苑が心の楽しさは何に譬へ
ん夜も無く夕也も帰りて今朝まで小梅に
帰りし其跡の小つゆは湯の帰りがけ向ふに
積の両親は素都太のがらに薬籐く家に芳町に
有りし頃小町芸妓と評判し容貌も今も繁
昌せしも程なりなれん花の體柳の眉の匂ひや
かなるもや嬋の方は見惚れて煙草をつけて

差出し〽チヨトー ぷくお召上りませんか〽アイと
云ひつゝ煙管を見てオヤ何様さまのごく烟
管を逆さまに出してかふ憎らきんぢやアない
かねへゆけど紙きるのかヲホヽ〽ヲヤとく何様
いたしませう此兎何そばせツイ浮れさのでござ
いますヲホヽヽト嬉しさをつぎかへて出まち〽オヤ
阿部ねへ彩らふ何を浮れるぞへお湯の留守に
情夫人の処からふ郵便でも来たのかへ〽オホヽ

恐れ入りますヨそんな事を被仰なら何でも浮れ
切てお煙管を逆さまに出して落しまち物
ヲ〽オホヽヽ〽きんは何をそんなに浮れるのだへ何
笑ねへ〽ナニ浮れさのは外の事でいありません余
り此花の嘉都がお美しいから見惚ましたのでご
ざいますヨ〽夫で浮れさと云のかへ当様は白
痴よしてお呉れで被ひヨ何程松が盛りの性なひ
といつてなぶるのんぢやアないヨ〽オホヽ何様


庭前の花も美人の色に恥る

ゆへしてお前さん器量なんだと其根るが出来ます
かのうかあ論ないマア実正な湯あがりのお顔のお
薬罐いの役法覧んあそばせお前の法自身のお顔ふ
お惚なさいますヨ 〽オヤ〳〵お前さんハ何ぞお云
のかね〳〵なんだ自惚のかたてもてまへの顔ふ
惚る者があるものかね〳〵 〽オホヽ左様でござ
いますが夫でも二階からでてその小さん
とか云ひました藝者衆ハお座敷へ出る時ふ姿

見の鏡の前で襟や帯を直して御自身の顔をチヨ
と御覧ハせ面影からと云つてお座敷へお掛な
さいますとサヨホヽしおかしいね〳〵何程佳
い女でもそんなきるハあるまいね〳〵 〽ヨホヽ左様
でおざいますそのねへ夫でも此の具服と申一廻
ふお出なますの桜田さんとか申役者が女形
のお咄しがなさいますそふ申のを申身の羽根
のうつくしいねのを見惚て溝へ顔を写して数刻

もし見てゐると御師匠さんぢやアありませんかネ〽ヨホ
ヲヤ夫ぢやア私を踊り上手でお云ひの人踊り
の鬼の鏡といふ人を根ぢやアないのかヨ鬼の鏡
とは踊るが自分の姿を水にうつし羽根の色の
美麗いのを見惚て目を廻して水に落て死ぬ
と云ふ事をたとへて踊の鬼の鏡と云ふのを
と桜雨さんが御師匠さんのごヨ〽オヤしらなんで
ざいますからわたしは此中も気根をとられ殺しませ

んでかうツイ高慢らしく不分解なことをやかし
ましたらう御免なさいましヨオヤお湯が沸たち
ましたからお茶をいれてお上げやませうネ〽アお茶
よりか加琲糖の方がいいヨ紹代の草角の中木
あるヨ〽オヤお茶の上服さの中にあるの
お煎でいつの間にやら出来てねえ〽ヨホし〽さうでがあ
ないヨだから前歯を喰たにも加琲糖を召上がるお顔
の上合が能ひといふくらいサアおまへんがつき出ませ

加排難を遊んでゐる〽きん「ほんに今日は清元のお
葉さんと何処へかお出遊ばしましたのでございますネ
のか〽つる「アヽ来る約束で連れの様子次第で松
へ止まるヨ〽きん「オヤさうでございますか〽つる「なぜ
でも旦那がおいでなさりましたらお出でなさいか〽きん「悔
しいぢやアなんぞ気色が悪いのヨ〽きん「オヤ
マア今朝間どお緩りになりましたさ切りのお急ぎ
いませんか〽つる「どうしても矢ぱり気ぢやアなし

か〽きん「オホヽヽ貴嬢もお慾が深ひぢやアありません
か一昨日入らしつて昨日も夜前もお泊りにな
つて緩々してもう松さんだは気の遠くなる
程お嬉しそうなお顔をして楽んでゐるの
ぢやアありませんかそうして私がお様子の外
に聞いて居ますと関夢の書き様の中にもお
前さんの母のな優しい別品な娘はないと旦那
が御飾ると貴嬢が去夜に葉の母のに左様で

まことも客君のやうな男もなしまさ家隠さんの
藝者らが坐の中りも娼の小今さんのやうなさ
つぱりとしたる娼女衆は一ツもありませんしぞ
んなる想ひきとて私のやうな野暮な者は逢ふも
無よ書ちやア笑されませんお根しおつう小今さ
んのやうよ婀娜な姿を見られまたぜうふうと気
師はさうが流られ知つてつりなまめきちやア身
皆ませんも私は天ひく気が遠くなつてつり自然

ごくなりましたれそう想ひましてマア是非も
なくお解りなされば結ひあんなにおさうさ目
今やア客嬢の御身の為よも悪く一私の家が
續ないともどすしさ亦ぞ〳〵へおや片ヤマアあんな
嘘をかうり十二法かり姿つかり三絃をきる
のかねへ手ウくへ一昨日は何時も優しく結構る
のよ人の気を嫉るをお云つて愛想尽しの邪障
を去なさるのぞアヲ大器小今さんと誰ろが

旦那をしめころさうのと違ひないと思ふは〽イヤ
それは若殿の邪推といふものでござりまする此
間私の呼きましたのにや〽オヤ誰に呼ひさの
だよ〽アノ此間若殿のお留主の時旦那のお使
に忠助どんがまゐりましたを見ますれば
其折忠助どんが咄しに旦那様の所で篇で
若殿のおとと残表向きは慈母さんへ申して窮屈
の旦那さまにお逢ひなされたさうんで今度出来

たお店のお見世の売物に一所に甚家
へお入れなされて体お妻の弘めをなる積り
でいふつしなると申すまでおざいますその世
誰がしめころさうとまどめして旦那さんが本気に
悪慾のものでおざいましたゆへ右様お云ひぶ素
人にならは蛇身を締りおしなさると何招して
も芸者衆のしめころさんとなられるは示を
いふ折から庭口の開戸を明て這のおならに〽イヤ、エ

唄女より女郎衆よりお客さんの方がどふも足
てひ継ひと云ふ評判でございますぜト言つゝ
入来るへ提花の光影に見る顔のお網淡の
都理中跡に續ひて入来るは小柄の提花二個を
も縁側小摺うち掛へヲヤ御前のおしさ子サア此方
へお出なさいましと急ひで其処を片付て提花を
向ひへお菊さんマア大そう遅うつさぢやアありま
せんかモウとう更ごうふ彼にお業ドきうしまして

へ十二案じるるすがある物ゥ今称姫はさぞかしご
四季時完へ来るたかりが家業とはいへでもねへが
へそれでもう姫り掛中小字さんの処へよりは
来るお出の時もお寄なさるものゝかふ遊くする
のでおやりねへ へオイそこおつねさん理中が藝よ
ねますませ窓り遠遠窓がなきる家の宅子 へ亦る十二
卯のお客だアありませんお中へさんだろふ能
ござります ねへ へナゼく私ぞうりはお悦惚哉

受ても能ひと親爺のかね保受賛なしの延の暁
惚と来ちやア遅路迷惑至極な泥寛でげせ子
ハアし〳〵へ夫でも旦那の親爺ハ勝ら理中がお
福の暖惚を云つて込るから何時思の愛けかへ
しろ志なひだちやアすまないとお云ひの気変ひ
ヲ揺まモヨへアいし一寸お寝ひ中さなの中まお
露さんは去ぬ人が悪くおありなさいましく道
理で清花さんの慈情なさるのも無理ぢやアねへ

へイヱ何招してお前さんがお福さんをかわひが
る様な小娘さんだのりそろハひがつておお出で
継ませんヨヲ申し〳〵へ何招しておお福よりか家
内の奴がかわいゝひろ志りやアしませんへ三人
ハアし〳〵ヲホヽヽ

落花清潭春風日記第五編上 終

010190517816